埼玉大学紀要　教育学部，66(2)：499－512（2017）

小学校英語指導に関する教員の不安度

―教員経験年数、英語指導年数、中学校英語教員免許の有無による違い―

及　川　　賢　　埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：小学校、外国語活動、英語、教員、不安

1．はじめに

平成23年４月から国公立小学校で５、６年生を対象とした「外国語活動」が必修となったが、早くも平成32年度からその外国語活動の対象が３、４年生となり、５、６年生は教科とてしての「外国語」が始まる。教材や授業時間数などのさまざまな問題が指摘される中、指導者に関わる諸問題も数多く指摘されている。現在の小学校の教員免許の取得には外国語あるいは英語に関わる単位の履修は不要であるため、英語力そのものはもちろん、指導法や評価法に関する教員の資質の問題点も指摘されている。一方で、突然生じた事態に教員側からも不安や懸念が表明されている。これらの不安や懸念事項を明らかにし、どのようなサポート体制が必要なのかを検討することが急務である。本研究は、小学校教員への質問紙調査からどのような点で教員が不安を感じているかを調査し、研修を含めたサポートについて提案を行う。なお、今回は質問紙調査の対象者が45名という少人数であったため、今後の同様の調査へ向けた予備調査として位置付けている。

2．先行文献

小学校教員の英語指導に対する不安のみを対象とした研究はまだ少なく、他の項目と合わせた総合的な調査の一部として報告されている場合が多い[1)]。代表的なところでは、Benesse教育開発センター（2011）が教務主任2,383人と５、６年の学級担任2,326人を対象とした大規模な調査を行っている。小学校英語教育に関わるさまざまな側面を明らかにしているが、その中で教師の不安や研修への希望、英語指導の実施状況を報告している。不安に関する項目は「あなたは外国語（英語）活動を指導することに自信がありますか」の問があり、これに対して「とても自信がある」が1.6%、「まあ自信がある」が30.1%となっている一方、「あまり自信がない」が56.1%、「まったく自信がない」が12.0%となっており、否定的な回答の方が多くなっている。また、教員が必要と感じる研修内容も報告されており、「指導法（歌、ゲーム、チャンツの進め方など）」「英語力（クラスルームイングリッシュなど）」「教材作成」「研究授業や授業研修会」などが上位にランクされている。間接的ながらこれらも教員の不安を表していると考えてよいだろう。

植松他（2012）は136名の小学校教員を対象としたアンケートを実施し、性別、年齢のなどの基本情報や「～ができるか」「どう考えるか」など28項目を尋ねた。その中に「自分ひとりで教えるのは不安だ」という項目があり（４件法で回答）、「そう思う」が43%、「ややそう思う」が27%、「あまりそう思わない」が18%、「そう思わない」が９％で、こちらも全体的には不安を感じている教員が多い結果になっている。また、「外国語活動（小学校英語教育）を実施する上での問題点は

何でしょうか？（自由記述）」には「発音を中心とした英語力」が27%と最も多く、「教員の負担増・教材不足」（17%）、「指導力」（13%）、「ALTとの打ち合わせがない」（６％）等が続いている（それぞれは類似の回答をまとめている）。また「外国語活動（小学校英語教育）を担当する上で、必要だと思う教員研修の内容は何でしょうか？（自由記述）」には「指導法（ゲーム・歌・アクティビティー）」（29%）、「英会話・英語・発音」（27%）、「クラスルームイングリッシュ」（12%）、「模擬授業・ビデオ授業」（８％）などが上位であった（それぞれは類似の回答をまとめている）。

猪井（2009）は41名の小学校教員にアンケート調査を実施した。担当学年、英語資格受験の有無などの背景情報やTTにおける立場、英語活動の負担感、望む研修内容等の14項目について尋ねているが、その中に「不安要素」がある。８つの項目（そのうち１つは「その他」で記述式）のうち不安度が高いと思う上位４項目を選んでもらい、各項目のパーセンテージを算出したところ、「自分の英語力」（97.6%）、「年間指導計画・授業指導案作成」（90.2%）、「実際の英語活動の進め方」（80.5%）、「教材の開発・準備」（80.5%）が上位に並んだ（それ以外の項目は「教員研修」「中学校との連携」「教員同士の協力体制」「その他」）。

教師の不安度を中心とした調査には米崎他（2016）がある。米崎他は174名の小学校教員に教科化と低学年化（外国語活動が３年生から開始されること）への不安を記述式で回答してもらい、その記述をKH Coder[2)]を用いて計量分析を行った。具体的には、どういう語句がどのくらい出現するのか、またどういう語句と共起するのかを見ることで、不安の「種類」と「量」を明らかにしている。分析の結果、教科化の不安は「評価」が最も大きく、「発音」「（児童が）苦手意識を持つこと」「専門性（がないのに教えること）」「専科教員（の不足）」「（児童の）学習負担の増大」「母語習得」が検出された。低学年化に関わる不安は「高学年や中学年との内容的連携」「母語習得」「学習負担増大」「教材・教科書」「苦手意識の早期化」「低学年からの英語教育の本質がわからなくなること」が検出された。共通する項目として、「教員の英語力・指導力」「国語や他教科とのバランス」（→母語習得への不安から）「児童の負担・混乱」の３つを挙げている。記述式であるため、アンケートでは想定できない不安要因も明らかにしている。

こういった調査が増える中、一方で、教員歴や英語指導歴など、教員の背景的要素と英語指導不安との関連を調べたものは少ない。例えば、Benesse教育開発センター（2011）は経験数等との関連を報告している。不安度に関する回答では「あまり自信がない」と「まったく自信がない」の合計が68.1%で全体としては否定的な傾向だが、英語活動指導年数や校内研修時間と自信度との関係を見ると、大まかな傾向として、年数や研修時間が多い教員ほど自信があると答える傾向があった。

猪井（2009）も複数項目との関連を見ているが、大きな関連は認められなかった。猪井は「海外渡航期間の長短」と不安要素との関連を調べており、渡航期間が10日以下のグループ、11～20日のグループ、21日以上の３グループ間で「自分の英語力」「年間指導計画・授業指導案作成」「実際の英語活動の進め方」「教材の開発・準備」「教員研修」「中学校との連携」「教員同士の協力体制」それぞれへの不安度に差があるかどうかを調査したところ、渡航期間の長い「21日以上」のグループが「実際の英語活動の進め方」のところで不安度が低く、「中学校との連携」で不安度が高いのみで、それ以外に目立った違いは報告されなかった。また、英語が好きかどうかという質問に「好きである」と答えたグループ、「何ともいえない」と答えたグループ、「好きではない」と答えたグループそれぞれの不安度を比較したところ、「教員研修」「中学校との連携」で「好きである」と答えたグループの不安度がわずかに高いのみであった。

関連が報告されているのは新谷・松川（2006）である。新谷・松川は263名の小学校教員から得た質問紙の結果をもとに、英語活動経験が３年以上の教員を「経験あり」、２年以下を「経験なし」に分類し、英語活動に関わる10項目について自信があるかないかを６件法（1～３を「自信なし」、４～６を「自信あり」に再分類）で回答してもらったところ、「英語指導法」「英語指導案」「評価」「ALTとの連携」「Classroom English」で有意差が生じた（分析にはカイ２乗と残差分析を用いた）。いずれも、英語活動の経験があるほうがそれぞれの項目に自信があると答えている。一方、「教材作り」「英語を聞き取る力」「英語を話す力」「英語の発音」「英語の文法事項」の自信については英語活動の経験との相関は見られなかった。

さまざまな背景を持つ小学校教員へのサポート体制を考えていく上で、教員経験や英語指導経験などの背景との関連を考えていくことは今後さらに必要になってくると思われるが、現時点ではその数も少なく、また結果も一様ではないため、さらなる調査が必要であろう。

３．調査

3-1　目的

本調査の目的は小学校英語指導に関わる教員の不安要因を教員の背景となるいくつかの要因との関連から明らかにすることである。具体的には以下の３点のリサーチ・クエスチョンに答えることである。

①　教員年数と英語指導不安度に関連はあるのか。

②　英語指導年数と英語指導不安度に関連はあるのか。

③　中学校英語教員免許の有無と英語指導不安度に関連はあるのか。

このうち、「教員年数」「英語指導年数」「中学校英語教員免許の有無」が独立変数であり、「英語指導不安度」が従属変数である。①の教員経験年数（回答は「年数」でお願いした。質問紙の実施が年度末に近かったため、月などの単位は切り上げることとした）は、一般的に考えて教員年数が増えるとともにさまざまな不安が減少することが想定されるが、一方で、英語に関しては多くの教員にとって経験が少ない科目であるため、経験年数ともに不安度が下がるかどうかが不明であるため、変数として扱うこととした。その英語の指導年数が②である。小学校における英語指導の経験を年数で回答してもらった。こちらのほうが指導年数とともに違いが出てくる可能性が高いが、英語指導不安の中でも特にどのような側面で不安があるのか、あるいは増大・減少するのかを明らかにする。③に関しては、現在小学校の教員免許取得に外国語（英語）関連の単位は必修ではないが、中学校の英語の教員免許を所持している小学校教員もいるため、変数として必要性があると考えた。中学校英語教員免許所持者は英語や指導法を一通り履修しているため不安度は低いと思われるが、こちらもどの不安側面に影響が表れるのかを明らかにする。

従属変数である英語指導不安は英語の指導の折に小学校教員が感じる不安のことで、今回は「英語授業の年間計画を作成すること」「英語の歌を指導すること」「英語で授業を進めること」「英語の発音」「英語を聞くこと」「英語を書くこと」など14項目から成る。詳しくは「方法及び手順」を参照して欲しい。

3-2　参加者

埼玉県内で開催された授業研究会に参加をされた45名の小学校教員にご協力いただいた。参加

者の教員経験年数は以下の通りである（表１）。

表１　参加者の教員年数

年数	人数
1～5年	13名
6～10年	13名
11～15年	3名
16～20年	3名
21～25年	4名
26～30年	1名
31年以上	8名
合計	45名

また、英語指導の経験年数も尋ねており、その内訳は以下の通りである（表２）。無回答や「ずっと」「10年以上」という不明確な回答は除外したため、回答数は41である。

表２　英語指導年数

年数	人数
経験なし	4名
1年	5名
2年	4名
3年	4名
4年	8名
5年	9名
7年	2名
9年	1名
10年	2名
17年	1名
24年	1名
合計	41名

さらに、中学校の英語教員免許状の有無も尋ねた（表３）。これら３つの背景情報が本調査での独立変数となる。

表３　中学校英語免許の有無

中免	人数
あり	12名
なし	33名
合計	45名

3-3　方法及び手順

「目的」でも示した通り、本調査は小学校教員の不安度を英語授業実施に関わる要因ごとに算出し、教員年数、英語指導年数、中学校英語教員免許の有無との関係から、その傾向を明らかにすることである。不安度という心理的な側面を調査するため、質問紙を用い、下記の項目について回答していただいた（【　】内の表記は本稿内での略称）。

◎独立変数

1．小学校での教員年数【教員年数】

2．小学校での英語（外国語活動）の指導年数【英語指導年数】

3．中学校英語免許の有無【中免】

(1及び２は年数で、３は「あり」「なし」のいずれかで回答)

◎従属変数（＝英語指導不安度：英語授業実施に関わる要因の不安度)

○授業力に関わる変数

・英語授業の年間計画を作成すること【年間計画】

・１時間の授業を作成すること【１時間計画】

・授業初めのあいさつ【挨拶】

・英語の歌を指導すること【歌】

・スキット（英語での寸劇）を演じること【スキット】

・英語を使った言語活動を作成すること【言語活動】

・英語で授業を進めること【英語で授業】

○自身の英語力に関する変数

・英語の文を作る【英文組み立て】

・英語の発音【発音】

・語彙【語彙】

・英語を聞くこと【聞く】

・英語を話すこと【話す】

・英語を読むこと【読む】

・英語を書くこと【書く】

上記の各項目の不安度を５段階のいずれかを選ぶ形で回答してもらった（1＝「とても不安だ」、２＝「どちらかと言えば、不安だ」、３＝「どちらとも言えない」、４＝「どちらかと言えば、不安はない」、５＝「不安はほとんどない」)。

英語指導不安に関わる項目は授業に関わる項目と自身の英語力に関わる項目に大別できる。これらは過去の研究でも指摘されている項目である。これらをさらに区分することで不安度をより詳細に見ることを目指した。研修会で質問紙を配布し、回答には５～10分を要した。

3-4　分析手法

独立変数単位で、年数あるいは中学校英語免許の有無が不安度と関連しているか否かを、ノンパラメトリック検定を用いて算出した。ノンパラメトリック検定を用いたのは、参加者数が少なめであることと、独立変数内でグループ分けをした場合、各グループの数がさらに少なくなるため、パラメトリック検定は適さないと判断したためである。

教員年数あるいは英語指導年数の違いがどこで現れるかを調査するためには、どこで年数を区切るかが重要になるが、今回は、例えば「教員年数」の場合、「１年以下とそれ以外」「２年以下とそれ以外」「３年以下とそれ以外」のように可能な限り細かくグループ分けを行うことで、年数の違いと不安度の違いに一定の傾向があるかどうかを調査した。中学校英語教員免許の有無は「あ

り」「なし」の２グループの違いで検証した。

また、独立変数ごとの分析に先立ち、従属変数である英語指導不安要因を因子分析を利用してグループ分けを行った。因子分析用いたのは、従属変数として用意した14の項目は調査者の主観が入るので、項目の妥当性をより客観的に判断するためである。いずれも、分析にはSPSSのバージョン23を用いた。

４．結果

4-1　概要

調査に参加した小学校教員の不安度の概要は以下の通りである（表４）。平均値の数字が小さいほうがより不安度が高いことを示している。

表４　小学校教員が不安を感じる項目

項目	平均	標準偏差
年間計画	2.11	1.07
語彙	2.18	0.94
発音	2.28	1.06
話す	2.30	0.91
書く	2.46	1.00
英文組み立て	2.50	1.02
言語活動	2.56	1.10
英語で授業	2.62	1.17
スキット	2.71	1.31
読む	2.74	0.98
聞く	2.81	0.93
1時間計画	2.90	1.14
歌	3.11	1.13
挨拶	3.69	1.02

年間計画がもっとも不安を感じる項目になっているが、２番目以降は、語彙、発音、話す、書く、など英語のスキルに関わるものが多い。一方で、挨拶や歌などは不安度が低い傾向にある。また、１時間の計画は比較的不安度が低い傾向にあり、同じ「計画」でも年間計画とは大きな乖離があることがわかる。

4-2　因子分析

しかし、このままでは全体的な傾向が捉えにくいので、因子分析を用いて、項目の背後にある共通因子を探り、より汎用性の高い要因を探ることとした。まず、固有値１以上を基準として、最尤法で初期解を求めたところ、６回の反復で３因子が抽出された。続いて、因子数を３に固定し、最尤法、プロマックス回転で分析を続行した結果、５回の回転で反復が収束し、３因子が抽出された。固有値の減衰状況と解釈可能性からこの３因子解を採用した（$\chi^2=63.67$、$p=.129$、表５）。

因子Ｉは、「発音」「書く」「語彙」「英文組み立て」「読む」「話す」「聞く」など英語力に関わる項目が多いため、「英語力因子」と命名した。英語力は過去の文献でも不安要因の１つとして報告

されることが多く、因子として妥当であると判断できる。

因子Ⅱに属する項目は「挨拶」「歌」「スキット」の３つで、いずれも小学校の英語の授業で頻度の高い活動である。よって「英語活動因子」と命名した。

因子Ⅲは「年間計画」「言語活動」「１時間計画」「英語で授業」に大きく寄与する因子で、授業の計画や実施に関わる。よって「英語授業因子」と命名した。

いずれも、信頼度係数（クロンバックαを使用）が高く（それぞれ、.929、.911、.888)、因子として十分成立していると思われる。これ以降の分析には、必要に応じてこれらの因子ごとの分析も加えていく。

表５　英語授業に対する不安項目の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

		因子		
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
因子Ⅰ　**英語力因子**（α＝**.929**）				
	発音	**.966**	.002	−.130
	書く	**.891**	.024	−.075
	語彙	**.883**	.054	.041
	英文組み立て	**.798**	.118	−.074
	読む	**.782**	−.180	.138
	話す	**.609**	.081	.218
	聞く	**.489**	−.046	.213
因子Ⅱ　**英語活動因子**（α＝**.911**）				
	挨拶	−.133	**1.043**	−.060
	歌	.131	**.782**	−.075
	スキット	.124	**.780**	.087
因子Ⅲ　**英語授業因子**（α＝**.888**）				
	年間計画	.049	−.193	**.845**
	言語活動	.192	.071	**.769**
	１時間計画	−.250	.327	**.767**
	英語で授業	.164	.088	**.660**
因子間相関		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
	Ⅰ	—	.41	.61
	Ⅱ	—	—	.65
	Ⅲ	—	—	—

＊因子抽出法：最尤法、回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法、5回の反復で回転が収束

4-3　教員年数による不安度の違い

続いて、教員年数による不安度の違いを調査した。年数の区切り方には多数のパターンが考えられるが、今回は「１年以下とそれ以外（＝２年以上)」「２年以下とそれ以外（＝３年以上)」のように１年単位で区切って比較を行った。独立変数によるMann-WhitneyのUを用い、ペア間で有意差があるかどうかを検証した。その結果、下記の区切りにおいて、示した項目に有意差が検出された。その中でも、下線を施した項目は教員年数が少ないグループの不安度のほうが高かった。

２年以下とそれ以外：<u>英語授業因子</u>（2年以下の不安度が高い）
３年以下とそれ以外：<u>英語授業因子</u>（3年以下の不安度が高い）
４年以下とそれ以外：<u>年間計画</u>、<u>英語授業因子</u>（全てにおいて４年以下の不安度が高い）
５年以下とそれ以外：<u>年間計画</u>、<u>１時間計画</u>、<u>英語授業因子</u>（全てにおいて５年以下の不安度が

高い）
６年以下とそれ以外：年間計画、１時間計画、言語活動、英語で授業、英語授業因子（全てにおいて６年以下の不安度が高い）
７年以下とそれ以外：年間計画（7年以下の不安度が高い）、歌（7年以下の不安度が低い）
８年以下とそれ以外：年間計画、英語で授業、発音（全てにおいて８年以下の不安度が高い）
９年以下とそれ以外：年間計画、発音（全てにおいて９年以下の不安度が高い）
21年以下とそれ以外：書く（21年以下の不安度が低い）
22年以下とそれ以外：書く（22年以下の不安度が低い）

また、各ペアにおける数値は以下の通りである。

２年以下（n＝６）とそれ以外（n＝37）：
・英語授業因子（U＝172.50、p＝.028、【平均ランク】２年目以下：11.75、それ以外：23.66）
３年以下（n＝７）とそれ以外（n＝36）：
・英語授業因子（U＝193.50、p＝.024、【平均ランク】３年目以下：12.36、それ以外：23.88）
４年以下（n＝11）とそれ以外（n＝34）：
・年間計画（U＝274.50、p＝.019、【平均ランク】４年目以下：15.05、それ以外：25.57）
・英語授業因子（U＝232.500、p＝.048、【平均ランク】４年目以下：15.15、それ以外：24.08）
５年以下（n＝13）とそれ以外（n＝32）：
・年間計画（U＝309.50、p＝.008、【平均ランク】５年目以下：15.19、それ以外：26.17）
・１時間計画（U＝284.50、p＝.046、【平均ランク】５年目以下：17.12、それ以外：25.39）
・英語授業因子（U＝263.50、p＝.035、【平均ランク】５年目以下：15.54、それ以外：24.50）
６年以下（n＝16）とそれ以外（n＝29）：
・年間計画（U＝350.00、p＝.003、【平均ランク】６年目以下：15.62、それ以外：27.07）
・１時間計画（U＝313.00、p＝.046、【平均ランク】年目以下：17.94、それ以外：25.79）
・言語活動（U＝319.00、p＝.028、【平均ランク】６年目以下：17.56、それ以外：26.00）
・英語で授業（U＝338.50、p＝.009、【平均ランク】６年目以下：16.34、それ以外：26.67）
・英語授業因子（U＝312.50、p＝.005、【平均ランク】６年目以下：14.18、それ以外：25.78）
７年以下（n＝19）とそれ以外（n＝26）：
・年間計画（U＝332.50、p＝.040【平均ランク】７年目以下：18.50、それ以外：26.29）
・歌（U＝165.00、p＝.048、【平均ランク】７年目以下：27.32、それ以外：19.85）
８年以下（n＝22）とそれ以外（n＝23）：
・年間計画（U＝352.50、p＝.019、【平均ランク】８年目以下：18.50、それ以外：27.30）
・英語で授業（U＝337.00、p＝.047、【平均ランク】８年目以下：19.18、それ以外：26.65）
・発音（U＝322.50、p＝.045、【平均ランク】８年目以下：18.64、それ以外：26.02）
９年以下（n＝23）とそれ以外（n＝22）：
・年間計画（U＝366.50、p＝.007、【平均ランク】９年目以下：18.07、それ以外：28.16）
・発音（U＝325.50、p＝.039、【平均ランク】９年目以下：18.70、それ以外：26.30）
21年以下（n＝40）とそれ以外（n＝５）：
・書く（U＝44.00、p＝.042、【平均ランク】21年目以下：24.40、それ以外：11.80）

22年以下（n＝41）とそれ以外（n＝4）：
・書く（U＝32.00、p＝.046、【平均ランク】21年目以下：24.22、それ以外：10.50）

4-4　英語指導年数

教員年数で違いが生じることが確認されたが、小学校の場合、教員年数と英語指導年数は一致しない。そこで、英語指導年数で違いが生じるかどうかを確認した。こちらも経験年数の区切り方には多数のパターンが考えられるが、今回は「1年以下とそれ以外（＝2年以上）」「2年以下とそれ以外（＝3年以上）」のように1年単位で区切って比較を行った。独立変数によるMann-WhitneyのUを用い、ペア間で有意差があるかどうかを検証した。その結果、下記の区切りにおいて、示した項目に有意差が検出された。また、すべての項目において、指導年数が少ないグループの不安度のほうが高かった。

2年以下とそれ以外：1時間計画、聞く（全てにおいて2年以下の不安度が高い）
3年以下とそれ以外：1時間計画、英語授業因子（全てにおいて3年以下の不安度が高い）
4年以下とそれ以外：年間計画、1時間計画、言語活動、英語で授業、英語授業因子（全てにおいて4年以下の不安度が高い）
5年以下とそれ以外:年間計画、1時間計画、挨拶、歌、スキット、言語活動、英語で授業、発音、語彙、話す、書く、英語力因子、英語活動因子、英語授業因子（全てにおいて5年以下の不安度が高い）
7年以下とそれ以外：年間計画、1時間計画、挨拶、言語活動、英語で授業、英語活動因子、英語授業因子（全てにおいて7年以下の不安度が高い）
9年以下とそれ以外：1時間計画、言語活動、英語で授業、英語活動因子、英語授業因子（全てにおいて9年以下の不安度が高い）

また、各ペアにおける数値は以下の通りである。

2年以下（n＝13）とそれ以外（n＝28）：
・1時間計画（U＝264.50、p＝.019、【平均ランク】2年目以下：14.65、それ以外：23.95）
・聞く（U＝260.50、p＝.026、【平均ランク】2年目以下：14.96、それ以外：23.80）
3年以下（n＝17）とそれ以外（n＝24）：
・1時間計画（U＝287.50、p＝.021、【平均ランク】3年目以下：16.09、それ以外：24.48）
・英語授業因子（U＝266.00、p＝.019、【平均ランク】3年目以下：14.88、それ以外：23.57）
4年以下（n＝25）とそれ以外（n＝16）：
・年間計画（U＝302.00、p＝.006、【平均ランク】4年目以下：16.92、それ以外：27.38）
・1時間計画（U＝317.50、p＝.001、【平均ランク】4年目以下：16.30、それ以外：28.34）
・言語活動（U＝290.50、p＝.014、【平均ランク】4年目以下：17.38、それ以外：26.66）
・英語で授業（U＝283.00、p＝.026、【平均ランク】4年目以下：17.68、それ以外：26.19）
・英語授業因子（U＝283.00、p＝.004、【平均ランク】4年目以下：15.70、それ以外：26.19）
5年以下（n＝34）とそれ以外（n＝7）：
・年間計画（U＝195.00、p＝.007、【平均ランク】5年目以下：18.76、それ以外：31.86）

・１時間計画（U＝218.50、p＜.001、【平均ランク】５年目以下：18.07、それ以外：35.21）
・挨拶（U＝189.00、p＝.014、【平均ランク】５年目以下：18.94、それ以外：31.00）
・歌（U＝177.50、p＝.041、【平均ランク】５年目以下：19.28、それ以外：29.36）
・スキット（U＝177.00、p＝.045、【平均ランク】５年目以下：19.29、それ以外：29.29）
・言語活動（U＝211.50、p＝.001、【平均ランク】５年目以下：18.28、それ以外：34.21）
・英語で授業（U＝205.50、p＝.001、【平均ランク】５年目以下：18.46、それ以外：33.36）
・発音（U＝171.50、p＝.044、【平均ランク】５年目以下：18.80、それ以外：28.50）
・語彙（U＝182.50、p＝.025、【平均ランク】５年目以下：19.13、それ以外：30.07）
・話す（U＝175.50、p＝.049、【平均ランク】５年目以下：19.34、それ以外：29.07）
・書く（U＝181.00、p＝.031、【平均ランク】５年目以下：19.18、それ以外：29.86）
・英語力因子（U＝168.00、p＝.040、【平均ランク】５年目以下：18.25、それ以外：28.00）
・英語活動因子（U＝192.00、p＝.002、【平均ランク】５年目以下：17.50、それ以外：31.43）
・英語授業因子（U＝210.00、p＜.001、【平均ランク】５年目以下：16.94、それ以外：34.00）
７年以下（n＝36）とそれ以外（n＝５）：
・年間計画（U＝142.00、p＝.037、【平均ランク】７年目以下：19.56、それ以外：31.40）
・１時間計画（U＝164.50、p＝.001、【平均ランク】７年目以下：18.93、それ以外：35.90）
・挨拶（U＝141.50、p＝.037、【平均ランク】７年目以下：19.57、それ以外：31.30）
・言語活動（U＝160.50、p＝.002、【平均ランク】７年目以下：19.04、それ以外：35.10）
・英語で授業（U＝148.50、p＝.016、【平均ランク】７年目以下：19.38、それ以外：32.70）
・英語活動因子（U＝146.00、p＝.008、【平均ランク】７年目以下：18.21、それ以外：32.02）
・英語授業因子（U＝158.00、p＝.001、【平均ランク】７年目以下：17.85、それ以外：34.60）
９年以下（n＝37）とそれ以外（n＝４）：
・１時間計画（U＝130.00、p＝.010、【平均ランク】９年目以下：19.49、それ以外：35.00）
・言語活動（U＝130.00、p＝.010、【平均ランク】９年目以下：19.49、それ以外：35.00）
・英語で授業（U＝118.50、p＝.048、【平均ランク】９年目以下：19.80、それ以外：32.12）
・英語活動因子（U＝115.00、p＝.036、【平均ランク】９年目以下：18.71、それ以外：31.25）
・英語授業因子（U＝127.00、p＝.005、【平均ランク】９年目以下：18.37、それ以外：34.025）

4-5　中学校英語教員免許の有無による違い

「目的」でも触れた通り、現在小学校の教員免許取得に外国語（英語）の履修は不必要であり、この点が小学校での外国語導入における問題点の根本となっているが、中学校英語教員免許取得者とそれ以外の教員で不安度に違いがある可能性が考えられたため、検証を行った。表６が各項目における中学校英語教員免許の有無で分けた各グループの平均点である。

表6　中学校英語免許の有無による不安度の違い

	中免あり	中免なし
年間計画	2.55（1.37）	1.94（0.95）
1時間計画	3.14（1.05）	2.78（1.18）
挨拶	4.09（0.83）	3.56（1.01）
歌	3.36（1.21）	3.03（1.03）

スキット	3.18（1.33）	2.53（1.22）
言語活動	3.09（1.22）	2.34（1.00）
英語で授業	3.18（1.25）	2.38（1.04）
英文組み立て	3.05（1.15）	2.23（0.79）
発音	3.00（1.27）	2.08（0.88）
語彙	2.73（1.10）	1.94（0.76）
聞く	3.41（0.80）	2.59（0.87）
話す	2.68（0.84）	2.09（0.78）
読む	3.27（1.10）	2.48（0.80）
書く	3.05（1.11）	2.19（0.78）
英語力因子	1.15（1.33）	0.00（0.96）
英語活動因子	0.37（0.84）	0.00（0.98）
英語授業因子	0.75（1.16）	0.00（0.96）

（カッコ内は標準偏差）

これらの違いに有意差が存在するかどうかを独立変数によるMann-WhitneyのUを用い、両グループ間に有意差があるかどうかを検証した。その結果､下記の項目において有意差が検出された。いずれも中学校英語免許を有さない教員グループの不安度のほうが高かった。

・英文組み立て（U＝83.00、p＝.020、【平均ランク】中免あり：27.45、中免なし：17.86）
・発音（U＝87.00、p＝.049、【平均ランク】中免あり：26.80、中免なし：18.40）
・語彙（U＝95.50、p＝.040、【平均ランク】中免あり：27.32、中免なし：18.68）
・聞く（U＝77.50、p＝.009、【平均ランク】中免あり：28.95、中免なし：18.08）
・話す（U＝98.00、p＝.049、【平均ランク】中免あり：27.09、中免なし：18.77）
・読む（U＝87.00、p＝.021、【平均ランク】中免あり：28.09、中免なし：18.40）
・書く（U＝79.00、p＝.010、【平均ランク】中免あり：28.82、中免なし：18.13）
・英語力因子（U＝78.00、p＝.031、【平均ランク】中免あり：26.70、中免なし：17.69）

5．考察

結果を踏まえ、リサーチ・クエスチョンごとに考察を加えていく。

① 教員年数と英語指導不安度に関連はあるのか。

本調査では経験年数の異なる集団に質問紙に回答してもらっているため、年数の違いは同じ集団の時間的変化を追ったものではないが、経年変化の間接的資料として見ることは可能であろう。教員年数の違いにより不安度に違いが表れる項目は「年間計画」「１時間計画」「言語活動」「英語で授業」が目立つ。「英語授業因子」も早い段階から現れているが、これはこの４つの項目の背後にある因子と推定できるので、同じ傾向を示している。すなわち、教員経験が増えるとともに、授業の計画や実施に関わる不安度は減少してくる可能性が指摘できる。ただし、１時間の授業計画は５、６年のところで不安度が減少しているが、「年間計画」は10年近く経たないと減少しないという点で違いがある。なお、「年間計画」が結果の概要において最も不安度が高い項目として挙げられているのに、教員年数の違いにより不安度が異なる項目として挙げられているのは、今回の

調査に若手が多かったためで、彼らの不安度の高さが全体に影響したものと思われる。

一方で、「挨拶」「歌」「スキット」などの英語活動に関わる項目はほとんど出てこないので、年数による変化は少ないと思われる。結果の概要においても、これらの項目は不安度が低い項目であるとの結果が出ており、どの年代も早い段階から不安が少ない項目であると思われる。

英語力に関わる項目も同様に教員経験の違いによる不安度の違いはほぼ見られない。しかし、こちらの場合は英語活動に関わる項目とは異なり、概要において、多くの項目が不安度の高い項目として挙げられている。すなわち、英語力に関わるこれらの項目は教員年数が増えても不安度が下がらないということになる。小学校において、長年英語が科目として扱われていなかった事実を踏まえれば、当然の結果と言えるであろう。

② 英語指導年数と英語指導不安度に関連はあるのか。

英語指導年数の調査も経験年数の異なる集団に質問紙に回答してもらっているため、経験年数の違いは同じ集団の時間的変化を追ったものではないが、経年変化の間接的資料として見ることは可能であろう。教員年数の違いにより不安度に違いが表れる項目のうち「年間計画」「１時間計画」「言語活動」「英語で授業」などの英語授業に関わる項目が早い段階で現れる。続いて、「挨拶」「歌」「スキット」などの英語活動に関わる項目が現れる。授業内でのパフォーマンスに関わる項目のほうが英語授業の計画・実施に関わる項目よりも不安度減少に時間がかかるようである。この点は教員経験年数で見た場合と異なる。同じ時期に「発音」「語彙」「話す」「書く」などの英語力に関わる項目で違いが出てくる。特に、「発音」「話す」「書く」はいずれもアウトプットに関わる項目なので、英語を発することの不安に差があると言える。また、全体的に見た場合、「５年以下とそれ以外」「７年以下とそれ以外」で違いのある項目が増えてくる。しかし、それ以降はほとんど差が生じない点を踏まえると、５～７年を過ぎたころからそれら減少してくる可能性がある。今後のより詳細な調査が必要であろう。

③ 中学校英語教員免許の有無と英語指導不安度に関連はあるのか。

中学校英語教員免許の有無による違いはかなりはっきりしており、「英文組み立て」「発音」「語彙」「聞く」「話す」「読む」「書く」「英語力因子」と、すべて英語力に関わる項目である。中学校英語教員免許取得者は英語に関わる単位を取得しており、有意差が表れるのは予想されていたことではあるが、数値でもはっきりと表れたことになる。

上記の結果をまとめると、英語力に関わる項目の不安度はどの年代でも高いが、英語指導歴が５～７年になるころで減少する可能性がある。一方、挨拶や歌、スキットなどの活動に対する不安は全体的に低く、おそくとも、英語指導年数が５～６年のところで不安度が減少すると思われる。また、授業計画や実施に関わる項目は、教員経験が浅い時期は不安度が高いが、経験が増えるとともに減少していく傾向にあるという指摘ができそうである。

６．今後へ向けての示唆

今回の調査結果を受けての示唆だが、教員の不安を解消するためのサポート体制としては、まず教員の英語力向上に役立つ手段を講ずることが急務である。特に、発音や話す、書くといったアウトプット関係の英語力を向上させる手段が必要となる。講習会の実施は有効な手段の１つだが、講師が一方的に情報を与えるだけの講義ではなく、ワークショップ的な研修が必要であろう。

また、ALTの配置を増やすことも有効である。ただし、これは単にALTの授業を増やすという

意味ではない。小学校の教員がALTと授業外で英語を使う時間を増やすことで英語力、特に話す力や発音、さらに語彙力の上昇を期待するというものである。休み時間や放課後などのすき間時間に簡単な会話を交わすだけでも教師の自信上昇につながり、不安が減少する可能性がある。多くの小学校でALTとの打ち合わせ時間がないなど、ALTの滞在時間に問題があることが指摘されている。予算措置なども含め、行政レベルでの改善が望まれる方策である。

どのような英語力が小学校教員に必要なのかを今後より詳細に調査していく必要があるが、小林・森谷（2009）が興味深い資料を提供している。小林・森谷は『英語ノート』に付属する『英語ノート指導資料（試作版）』で示されている教師の英語表現例を分析し、小学校教員に必要とされる英語を語彙、発話の長さ、発話の形式、文の種類、教室談話の観点から分析し、平均発話長は4.52語、単文が中心、５年生は命令文が多いが６年生は平叙文が多い、などの特徴を明らかにしている。これらは教員に必要とされる英語を具体的に示した例として注目される。

また、計画の立て方や１時間の計画、言語活動の作り方、英語で授業を行う方法などの重要度も高いことは変わらない。データを見ると、経験年数の経過とともに不安が減少していく可能性が指摘できるが、もしそうであるとすれば、簡単な講義やワークショップなどを早い段階で行えば、さらに早い段階で不安度が減少する可能性もある。

教員養成レベルでのサポートも今後さらに重要になる。東京学芸大学（2017）は教員養成課程の大学教員や関連学会、有識者などからの意見聴取を基に、今後の小学校教員養成課程と自治体等が計画する研修のための外国語（英語）コアカリキュラムを発表しており、具体的な項目が提案されている。今後、教員養成課程を持つ大学で学生のニーズなどを把握しながらカリキュラム作りをしていく必要があるだろう。

７．おわりに

本研究では、質問紙を通じて小学校教員の背景的要因と不安度の関連を調査したところ、英語力に関する不安が大きく、英語活動に関する不安や英語授業準備・実施に関わる不安は経験年数とともに減少する可能性があることを指摘できた。

今後は調査項目を精査し、また調査協力者を増やして実施する必要がある。調査項目のなかで今回不足していたのは評価に関わる項目である。現時点で評価は文章表記による評価のみであるため、またBenesse教育開発センター（2011）でも評価に対する必要度は24.1%と低めであったことから項目には加えなかったが、今後の教科化やここ数年の文献（例：米崎他（2016））などで評価は不安度の高い項目として挙げられるようになっているので、今後は加える必要があるだろう。

注

１）小学校での正式科目名は「外国語活動」であるが実質的には英語が指導されているので、特に必要がない限り、本稿では「英語」を使用する。もちろんこれは他の外国語を軽んじるものではない。

２）KH Coderとは、立命館大学の樋口耕一氏が開発した無料ソフトで、テキストデータ解析のスタンダートソフトとして利用が広がっている（http://khc.sourceforge.net/）。

引用文献

Benesse教育開発センター．（2011）．『第２回 小学校英語に関する基本調査（教員調査）』東京：ベネッセコーポレーション．http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179

猪井新一．(2009)．「英語活動に対する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』*28*，49–63．
植松茂男・粕谷恭子・上原明子・北村尚紀・衣笠知子・佐藤玲子・高橋美由紀・柳善和．(2012)．「習熟度・開始学年・時間数の関係―教師に対する予備調査報告―」『小学校英語教育学会紀要』*12*，138–146．
小林美代子・森谷浩士．(2009)．「小学校英語活動指導に必要な英語力とは？」『小学校英語教育学会紀要』*10*，19–24．
新谷敦子・松川禮子．(2006)．「英語活動経験による学級担任の意識変化」『小学校英語教育学会紀要』*7*，13–18．
東京学芸大学．(2017)．『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』東京：文部科学省．
米崎里・多良静也・佃由紀子．(2016)．「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安―その構造と変遷―」*JES Journal 16*，132–146．

(2017年３月31日提出)
(2017年４月17日受理)